

2000年(平成12年)12月20日

アイヌタイムズ第15号日本語版

有珠山が噴火しました

2000年3月末、今まで虻田町は大地が静かであったけれども、ある時から地震が起りすぎるのを人は不思議に思いました。毎日地震が起きたので、町の住人が逃げました。

その後、2000年3月31日に有珠山が噴火しました。

有珠山は、今まで7回噴火したと言われてい

ます。
1663年には、噴火して、家が焼失して5人亡くなりました。

1769年には、山が噴火して火が下りて(編註：火砕流のこと)、家が焼失しました。

1822年には、噴火した火が下りて、虻田集落が全滅し、50名亡くなりました。

その後、噴火したために1853年には大有珠ができ、1910年には明治新山ができ、1944年には昭和山ができました。

1822年には、虻田の住民は、最初に噴火した際に避難しましたが、十数日たった頃に「もういいだろう」と考えながら戻りました。しかし再び山は噴火したので、多くの人が亡くなりました。

いったん山が噴火すると、その後静かなように見えても、本当に危ないのです。雲仙普賢岳

も同じでした。

1822年に、有珠山の話はユーカラでも歌われたそうです。

白老のアイヌ民族博物館は、研究報告書第4号に、そのユーカラを書きました。

そのユーカラには、真夜中から噴火した山、噴火した火が虻田の集落を消した。虻田の集落から逃げていった者は、海に飛び込んだ者は燃える石やら灰やらが降るため頭が焼け、潜っても海水を飲んで腹をふくらました、ということが書かれています。

今年は、みんなが注意したので、死者はありませんでした。

洞爺の町(洞爺湖温泉町)の西にある山麓(山の脇)から噴火しました。

3200mほど噴煙がのびました。一万六千人ほどの人が避難しました。

洞爺の町では、熱い土水(熱泥流)が出て、山のふもとの家がこわれたり、飛んだ石(噴石)が家に穴をあけたりしました。

その後、泥や火山灰がたくさんありましたが、もう人々は取り除きつつます。

早く彼ら全員が帰宅できて安心して暮らすこ

とができればよいと思います（編註：執筆当時の状況より）。

[横山 裕之] 沙流・千歳

『アイヌタイムズ日本語版』について

日本語版の内容は1号前の『アイヌタイムズ』の記事の和訳です。特に表記がないかぎり、和訳は元記事の著者の手によるものです。なお、和訳中にアイヌ語が登場するときにはカタカナ表記を用い、子音の表記は小文字を使用しました。

アイヌタイムズ第15号日本語版 (季刊)

発行所	アイヌ語ペンクラブ 〒055-0101 沙流郡平取町二風谷 80-25
発行責任者	野本 久栄
編集責任者	浜田 隆史
日本語版担当	稲垣 克彦